

主 題：希 望

聖書箇所：使徒の働き 3章15節

今朝もこうしてよみがえられた主を礼拝できることを本当に感謝します。

☆ 希望とは

先日、あるテレビの有名なキャスターが人々は今希望を求めていると話していました。確かにそのとおりだと私も思うし、皆さんもそう思われるでしょう。では一体この“希望”とは一体何なのでしょう？ どういう意味なのでしょう？ 辞書によれば、「あることの実現を望むこと」、「将来に寄せる期待」と定義します。広辞苑も「将来によいことを期待する気持ちである」と記しています。“期待”というのは「将来そのことが実現すればいいと当てにして待つこと」であると記されています。これが“希望”だとするならば、この“希望”の実現の確率は50%です。実現するかもしれないし、しないかもしれません。ただ実現することを信じて待つ、期待することしかできない。これがこの世の中が教える“希望”だとすれば、私たちが持っている“希望”はこのようなものではありません。なぜなら我々が持つ“希望”というのは“期待”ではないからです。それは100%確実に必ず実現することを私たちは信じています。

ではその根拠は一体何か、その保証は一体何かと人々は私たちに尋ねるかもしれません。私たちはこう答えます。それはイエス・キリストの復活だと。使徒の働き3：15に「生まれつき足のきかない男」を癒した後、群衆に対してペテロはこんなことを語りました。「いのちの君を殺しました。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」と。主イエス・キリストが十字架で亡くなった後、希望を失ってしまった彼らが希望を持って、強い確信を持って生きる者たちへと変えられました。彼らを変えた出来事はイエス・キリストの復活だったのです。彼らは肉体を持ってよみがえられたイエス・キリストを実際に自分たちの目で見、その御からだに触れることができたのです。

エドワード・モートという牧師は讃美歌280番を書きました。“わが身の望みは ただ主にあるのみ”と。1番に“わが身ののぞみは、ただ主にかかれり、主イエスの外にはよるべき方なし”とあります。実際に彼は“私の希望はイエスの上に築かれているのだ”とこの歌詞を記しました。私たちの希望はイエス・キリストであると。この方の上に私たちはみずからの信仰を建て上げているのであると。私たちのために十字架で贖いを成し遂げてくださった主、この主がその死から約束どおり肉体を持って敢然とよみがえってくださったことが私たちクリスチャンの希望の土台であり確信なのです。

パウロはコリントの教会に宛ててこんなメッセージを送っています。Iコリント15：19－20に「もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」とあります。私たちの信仰はただの淡い期待ではない。我々の信仰はイエス・キリストの十字架と復活に基づいたものであって、パウロはイエスの復活を目撃したゆえに、確信を持ってそのことを語ったのです。

◎ イエスの復活が証明したこと

イエス・キリストの復活が証明したことが二つあります。

- ① 主イエス・キリストがまことの救い主だということ
- ② 主イエスの語られていたことがすべて真実であるということ

イエス様の復活によって、イエス・キリストが確かに約束の救世主であり、イエス様がお語りになっておられたことがすべて真実だということを明らかにしたのです。だから私たちは主が語られたこと、主が約束されたことが必ずすべて成就すると信じることができます。主イエス・キリストの復活が我々の希望の礎だと言えるのです。ですからたとえ不安に陥ることがあったとしても、主は約束されたことを必ず実行されるとあなたが信じるなら、あなたが主からいただいた希望を失うことは決してありません。

先ほどご紹介した讃美歌280番の3番にはこう出てきます。“この世ののぞみの 消えゆくときにも、こころは動かじ、御誓い頼めば”と。希望が消えかけるようなことになっても、神の御誓いに、神の御約束に私たちが信頼を置くならば私たちの心は動かないと。ですから私たちの信仰というのはこの主を信頼するかどうか、そこにかかっていると言うことができます。

☆ 主が与えてくださった9つの約束

きょうこのイースターの朝、私たちが何をしたいかという、では主がどんな約束をあなたや私に与えてくださったのかをいま一度皆さんにお教えすることができればと思います。9つの約束をまず見て

いきましょう。

1. 「罪の赦し」 コロサイ 1 : 14、ローマ 3 : 24

まず神は罪の赦しという約束を下さいました。コロサイ 1 : 14に「この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」とパウロは記しています。この「贖い」ということばは身代金等を払って奴隷を買い取るということです。奴隷を奴隷市場から買い取り、彼を解放するということです。パウロはこのことばを使うことによって私たちの罪の代価として支払われた主イエス・キリストのいのち、この代価によって主イエスを信じる私たちに罪の赦しを与えられたと。そしてそのことを証明することがこのイエス・キリストの復活であつたと教えます。パウロはローマ 4 : 25に「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」と記しています。イエス様の体がまだ今墓の中に収められているとするならば、イエス・キリストは救い主ではなかったのです。イエス様が言われたことを我々は信じることはできない。でも約束どおりよみがえって来られたことによって、私たちはこの方を信じることができるし、信頼を置くことができるのです。

もちろん私たちが知っているのは、この罪の赦しというのは一方的な神の恵みであつて、私たちの行いによるものではないということです。パウロがローマ 3 : 24で「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」と言います。この「価なしに義と認められる」というのは、「無償で」とか「無料で」という意味です。救いというのは、私たちが努力をして勝ち取るものではなく、神ご自身の賜物として、ギフトとして私たちに与えられるものであると。これが主の御旨であると教えるのです。しかもパウロはここで「キリスト……による」と書いています。これは「キリストにある」とも訳せることばです。つまりこの贖いの力が主イエス・キリストのうちにあるのだとパウロは教えます。だから彼は救い主なのです。そしてこのイエス・キリストを信じた私たちに、神はすばらしい罪の赦し、永遠の救いという祝福を下さつたのです。

2. 「罪に勝つ力」 ローマ 12 : 21

二つ目に罪に勝つ力も神は私たちに与えてくださいました。つまりイエス・キリストを信じ、この救いにあずかつた私たちは、勝利ある生活を送ることができるということです。ローマ 12 : 21にパウロは「悪に負けてはいけません。かえつて、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」と記しています。この「負けてはいけません」と「打ち勝ちなさい」というのは同じことばが使われています。もし人のした悪に対してあなたが悪で応じた場合は悪が勝利することになる。でも悪に対してあなたが善で応じた場合は、善が勝利することになるとパウロは教えます。彼は人の悪に対しても、どんなことに対しても神がお喜びになる、神の前に正しい善を行い続けていきなさいと言います。なぜなら、その時に私たちは神の栄光を現すからです。そして私たちが覚えるべきことは、このような生き方を私たち救いにあずかつた者たちはなすことができるということです。私たちにできないことを神がお命じになったとしたら、それは我々にとって重荷です。でも神は私たちにできることを命じておられる。可能だからそのことを私たちに命じたのです。

では、どうしたら悪に対して善をもって打ち勝つことができるのか——。皆さんもよくご存じのガラテヤ 5 : 16でパウロは「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と記してくれています。この「御霊」ということばは聖霊のことであり、同時に救いにあずかつたクリスチャンに可能となった聖霊による新しい生き方を意味しています。「御霊によって歩みなさい」、それはあなたは聖霊によってこれまでとは違う新しい生き方を歩むことができると教えるのです。「歩みなさい」というのは、そのように生きなさい、そのように行動しなさいという命令です。しかもこの命令は現在形です。聖霊によって継続してそのように生きていきなさい、そんなふうに暮らしていきなさいと。つまりその与えられた一日の一瞬一瞬を神の助けを求めながら生きていきなさいとパウロは命じるのです。当然私たちがその歩みをなしていくために、「聖霊によって」と言う以上、聖霊の助けを求めながらです。私たちがこの新しい歩みをなしていくために、神に喜ばれる歩みをなしていくために、間違いなく必要なのは神の助けです。神に助けを求めながら新しい歩みをしていきなさいとパウロは教えます。また「御霊によって歩む」ために、私たちが覚えなければいけないことは、自分の考えや計画、また夢もすべて捨てて御霊のみこころとその導きに完全に従うことが必要だということです。自分たちのやりたいことをやろうとしている状態で神のみこころに従うことはできません。だから私たちはその自分の思いや考えや計画、すべてのことを捨てて、「主よ、あなたのみこころに従います」と決心して歩むことが必要です。

パウロは「そうすれば」と言います。もしあなたがそのように歩むならば、結果として「欲望を満足させるようなことはありません」と言うのです。「欲望」というのは救われる前に私たちが歩んできた歩みです。肉の赴くままに生きてきたかつての生き方のことです。自分の好きなように生きて、神を全く無視して自分さえ楽しければいい、そのようなかつての生き方です。それを「満足させるようなことはありません

せん」と。悲しいですが、救いにあずかった私たちも肉を持っている以上、かつての生き方に、その肉は引っ張って行こうとします。でもあなたが御霊によって歩むなら、あなたの肉が願うことを成し遂げさせない、あなたの肉が願うことを達成させない、そんなふうに主が助けてくださるという話です。ここには二つの否定語が並んでいます。パウロが言いたいのは、もしあなたが御霊によって歩むならば絶対に「欲望を満足させるようなことは」ないと。これは私たちに対するすばらしい希望です。私たちはこんな歩みをなすことができる者へと生まれ変わったのです。これが主が私たちに教えてくださっている救いです。我々は罪の呪い、罪のさばきから救い出されただけではない。日々の生活においても、この罪の力に我々は勝利することができる。もちろん実生活において我々が数々の敗北を喫していることも我々はもう知っています。しかし、このように生きることができる者へと私たちは生まれ変わったのだからそのように生きていきなさい。失敗したらもう一度立ち返って、そのように歩み続けなさい。あなたや私は罪に勝利できる者として生まれ変わったのだ、それが神の約束だと教えてくれるのです。そしてそれこそが神の栄光を現す生き方です。

3. 「永遠の住まい」 ヨハネ 14 : 2、Ⅱコリント 5 : 1

三つ目に、神は私たちには永遠の住まいを約束してくださった。それゆえに我々はきょうが地上における最後の日だとしても、その後どこに行くかを知っています。「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。」、ヨハネ 14 : 2 でイエス様がそう言われた。「備えたら、また来て、あなたがたをわたしのものと迎えます。」と。私たちがどこに行き、どこで永遠を過ごすのかを神はちゃんと約束してくださっている。ありがたい話です。ある面では、我々はその日を待っています。なぜならその日私たちはイエス様にお会いするからです。私は死んでも生きるという確信を持って、その希望を持って生きる、そんな者へと生まれ変わらせてくださった。これもすべて神の恵みです。だからクリスチャンである皆さん、この希望を感謝しながら、今日を生きることです。

パウロはⅡコリント 5 : 1 でこう言います。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、」、つまりこの肉体が滅んだとしても「神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。」と。だから私たちはこの地上のただの寄留者にすぎない、旅人にすぎないと。ここは私たちの家ではないのです。すばらしい永遠の家が神によって備えられているのです。こんなすばらしい約束を神は私たちに下さった。

4. 「主の助け」 ヨハネ 14 : 16、マタイ 28 : 20、ヘブル 13 : 5

四つ目に主が与えてくださったものは主の助けです。助け主がいつもともにいて助けてくださる。先ほども見てきたように、私たちがクリスチャンとして歩んで行くためには間違いなく神の助けが必要です。そのことを十分にご存じである神は我々のために助け主を与えてくださった。皆さんもよくご存じのように、ヨハネ 14 : 16 でイエス様がそのことをお話しになった。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」と。いつまでも永遠に終わることなくともにいてくださる「もうひとりの助け主」、既に学んだように主イエス・キリストと本質的に同じ方、つまり神であられる方が私たちのうちに内住してくださると。

聖霊なる神が私たちには与えられました。聖霊なる神が私たちを住まいとして住んでくださっている。そして主ご自身もこんな約束を弟子たちに与えられました。「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と。たとえ私たちが神様との距離を感じたとしても聖書は私たちには神は決してあなたから離れることはないと教えます。なぜならあなたのうちに聖霊なる神が内住して下さっているからです。ローマ 8 : 37 を開いてみてください。パウロは「しかし、私たちは、私たちを愛して下さった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」と言います。パウロが言いたかったことは、聖霊をいただいた私たちは勝利者として生きることができる、普通の勝利者ではない、それ以上のものだ。最も名誉ある喜ばしい勝利を勝ち続けている、そういうアイデアがこの言葉の中にあるのです。私たちは勝利者として主とともに歩む者とされ、そしてそのような勝利者として日々の生活を歩み続けているのです。

ですから、35節のところでパウロは、患難であっても、苦しみであっても、迫害であっても、飢えであっても、裸であっても、危険であっても、剣であっても、そのような中であっても私たちは最もすばらしい勝利をもって勝ち続けることができるのだと言います。つまり神が我々のうちにいてくださるということは、私たちはこのすばらしい勝利という約束をいただいているのです。確かにさまざまな困難があるでしょう。実際に彼らはそのような困難を経験していました。でもそのような中であっても、私たちは問題に飲まれるのではなくてその問題を逆に飲み込むことができる。そのようなもののもたらすいろいろな悩みや苦しみ、そういう問題に打ち勝つことができる。そのような中であっても私たちは

喜びを持って、「神様、感謝します」という感謝を持って生きることができるとパウロは教えたかったのです。

なぜ信仰者はそのような歩みができたのか——。秘訣はここです。彼らは自分たちの周りに起こるさまざまな問題、もちろんこれは自分の罪がきっかけであったら、神はその罪に気づかせるために、さまざまなことをもたらされます。でもあなたが神様とともに歩んでおられる、その中にあっていろいろな悲しみや苦しみ、いろいろな問題に遭遇します。覚えるべきことは、このすべてのことは主がよしとされたことだということです。神の許可のもとにそういったことが私たちの生活の中に訪れるのです。で、あるならば、それはあえて神様があなたや私に与えてくださったものです。あなたや私にとってそれは有益なものなのです。それを知ったゆえに、私たちはどんな時でも主に対する期待を持つのです。あなたや私が経験する困難や苦しみ、問題は信仰を成長させる機会となり得るのです。もし、あなたや私とその状況の中で正しく対応するならばです。今も私たちは大変な、目に見ることのないウィルスの恐怖を感じています。この世の中は大変な恐れを抱えています。でも我々信仰者はその中にあって、そのすべてのことを主がご存じであることを覚える時、その中でも我々は感謝できる、我々は期待できるのです。あなたがなそうとしておられるみわざをなしてください、そのみわざがなされることを期待しますと。多くの人々はこの恐怖に押しつぶされていきます。今、このウィルスの感染によって、ただ病気の恐怖だけではなく、仕事を失った人もたくさんおられます。大変辛いことです。ですから今世界じゅうで多くの自殺者が出ています。確かに今まで頼りとしてきたものが、一瞬のうちに奪い去られてしまうと希望を失ってしまうものです。でも我々信仰者はその中にあって、変わることもない神を信じる者です。そしてこの神の助けをいただきながら、そのような絶望的に思える状況の中でも、我々は主を見上げて「私はあなたを信頼します」と。その時に、その問題に勝利することができる。問題は解決しないかもしれない。でも少なくとも不安や恐れが私の心を満たしているとするならば、そこから解放されます。その思いに対して勝利を得ることができる。そんな中でも我々は神を見上げて感謝を持って歩むことができる。それが私たちの確信です。

5. 「主の憐れみ」 ヘブル4：15、出エジプト3：7、ヤコブ5：11

5番目に私たちが見るべきことは主の憐れみです。主はあなたのすべてを理解して、あなたに同情してくださるということです。感謝なことに私たちは自分のいろいろな問題を神様に説明する必要はないということです。神はすべてわかってくださっている。ヘブル4：15に「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」とあります。頭で、「わかってるよ、あなたの苦しみは」ではなくて、誘惑やさまざまな苦しみを経験している弱い者と一緒に主は苦しんでくださると。私たちの主は同情心に富んだお方であると言います。「すべての点で、私たちと同じように、試みに会われた」とありました。つまり私たちが経験する孤独、苦しみ、悲しみやさまざまな誘惑に対しても主はそれらを経験したと言うのです。私たちと主が違うところは、主は誘惑をお受けになっても罪を犯すことがなかったということです。

でも言えることは、主は私たちが経験したことのないような誘惑もお受けになったのです。サタンから直接誘惑をお受けになった。だからその誘惑がどんなに力あるものか、恐ろしいものかをわかってくださっている。それで神様はあわれみのゆえに私たちに必要な助け主を与えてくださったのです。ちょうどイスラエルの民が奴隷としてエジプトに捕らわれていた時に、出エジプト3：7で「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている。」と主は言われました。私たちの痛みもちゃんとわかってくださるお方だと。ヤコブ5：11に「主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。」とあります。感謝だと思いませんか？これが私たちの主なのです。あなたや私のことをだれよりもわかってくださっていると。そしてただわかっていただけではない。私たちに同情してくださると。もちろん私たちが罪を犯すことを許可されるわけではありません。でも我々はどうにも弱く罪深い存在であるかを主はご存じであり、我々に必要な助けを与え続けてくださるお方であると。

6. 「主の満たし」 使徒2：28、Iテモテ6：17、ピリピ4：19、マタイ6：25-34

主は私たちに罪の赦しを下さり、罪に打ち勝つ力を与えてくださり、永遠の住まいを与えてくださり、そして助けを下さった。同時に私たちに憐れみを与え続けてくださっていると。6番目に主の満たしが約束されています。つまり主はあなたの必要を満たすということです。

使徒2：28にダビデのあかしが記されています。「あなたは、私にいのちの道を知らせ、御顔を示して、私を喜びで満たしてください。」と。あのダビデも神様は必要を満たしてくださいとわかっていたのです。喜びが必要な時に喜びをもって私を満たしてくださいとお方であると。パウロはIテモテ6：17で「この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」と言いま

す。感謝なことに神は物質的にも、精神的にもあなたのすべての必要をご存じです。そしてちゃんと神様はその必要を与えてくださる。問題は私たちが神の最善の時を待つかどうかです。ピリピ 4 : 19

「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください」と。信仰者の皆さん、想像できるのはこれからしばらくの間、世の中は大変苦しい時を迎えるでしょう。でも私たち信仰者はこの神の約束に立つことができる。神はあなたの必要をちゃんと満たしてくださいと。

とするならば、今あなたが経験すること、またこれから経験していくこと、そのすべてのことを神はご存じであり、そして我々にとって最も大切なこの神を本当に心から信頼するかどうかしっかり学ぶ機会として、神は今のさまざまな困難を与えてくださっていると思いませんか？神はあなたのすべてのことを知った上であなたに必要なことをなしてくださるのです。必要を与えると神は言われた。ですから、イエス様が山上の説教の中のマタイ 6 : 25 - 34 で言われたように、空の鳥を見てみなさい、野の花を見てみなさい、だれが養っているのかと。その中で「きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。」とあります。なぜ主がこんなことを言われたかということ、人々はいろいろな出来事で慌てふためき、平安を失ってしまうからです。心が騒ぐからです。そこで主がお教えになったのは、だれがこの自然界をちゃんと保っているのか。だれがあ野の草や花に栄養を与えるのか。我々がそのことを覚えるならば、「何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているもの」で、神を知らない者たちが求めることだと。「しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。」、神はあなたの必要を満たすと、その約束を信じます？

私たちは頭でわかっていながらも、毎日の生活を見たり、収入を見たり、貯金通帳を見ることによって、「神様、なぜこういうことが……」とその確信がぐらついていたりする。我々は神に信頼できるということがどれほど素晴らしい祝福なのかということ頭でわかっているつもりでいながら、実際のところはわかっていないのです。ですから神は私たちにそのことをしっかりと学び取るように、それを確信できるようにとさまざまなレッスンの機会を与えてくださっている。神様は本当に信頼に値するお方なのだとしっかりと学ぶことです。

ヘブル 13 : 5 にこんなレッスンが記されています。「**金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。**主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』」と。恐らくこのみことばをごらんになった時に、後半の「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」ということばは何度も聞いているし、私をととても励ますと多くの皆さんが非常に愛しておられる箇所ではないかと思えます。でもこの5節を文脈から見た時に、このヘブル書の著者は「**金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい**」と言ってからこう言ったのです。私たちは文脈から主のおことばを理解することが必要です。まず「**金銭を愛する生活**」をしてはいけないと言うのです。なぜそれが罪なのかというと、金銭を愛する人々というのは今我々が見てきた神は必要を満たすのだという約束を信じていないからです。彼らはその約束を知ってはいても自分で頑張らないといけないと言って金銭を愛していると。また同時にこの人は神以外のもの、間違っただけのものを信頼しているからです。だから先ほども言ったように、貯金通帳の中に記されている金額によってほっとしたり、不安を感じたりする。間違っただけのものに信頼を置き、間違っただけのものに安心を求めようとしているからです。

ソロモンは箴言 23 : 5 で「**富は必ず翼をつけて、わしのように天へ飛んで行く。**」と言います。著者が言いたかったことは、こういった空しいものに心をとめて、そういうものを愛する生活をしてはいけないと。今持っているもので満足しなさいと。だから私たちにとって必要なのは、本当に、しかも永遠に価値ある富とは一体何かを考えることです。同時に我々が覚えなければいけないのは、神様は必ず約束を守ることです。どんな約束か——。あなたの必要を満たすということです。ですからヘブル書の著者が言いたかったのは、神ではなくて金銭を愛してそこに信頼を置こうとしている者たちに対してそれは違うのだ。金銭に満足を求めようとしてもそこにはありません。だから金額が大きく変わることによって、不安を抱いたり、そしてある時は満足を感じたりするのです。この著者が言いたいのは、本当の満足というのはそこではない。本当の満足というのは神なのだと。実は「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」というこの有名なところを直訳すれば、「ない、ない。わたしがあなたを離れることはしない。ない、ない。わたしがあなたを見捨てることは。」となります。変な日本語ですが、五つの否定語をここで使うのです。ですからこの5節のみことばで、この著者が言いたかったことは、「決して、断じてしない、あなたを支援しないで離れることはしない。決して断じて苦しみ、悲しんでいるあなたを窮地に捨て置くこと、見殺しにすることは決してない」と。それがここでこのみこ

とばが我々に教えることです。神がいつもそばにいてくださることをただ喜ぶことではないのです。著者が言いたかったことはあなたが主に信頼を置くならば、主はこのような約束をもってあなたの必要を満たしてくださる、だから神に信頼を置くことがどれほど我々に与えられた祝福かということです。

こんな強い約束を全能なる神様が私たちに下さったのです。だから我々の信頼を一体どこに置いているのか、何を優先しているのかです。しかも、「主ご自身がこう言われるのです。」、この「言われ」というのは完了形です。過去にそう言われたし、その約束は今も変わっていないからです。今あなたが直面している問題が一体何であったとしても、主を信頼することです。こんな全能なお方に信頼を置いて歩めるというのは我々クリスチャンだけに与えられたすばらしい祝福です。

7. 「主の器」 II テモテ 2 : 21

7 番目、主の器であると。つまり私たちは主に用いられるということです。II テモテ 2 : 21 に「ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」、この世の中はあなたにいろいろな評価をするでしょう。役に立たないと言われるかもしれない。そのように思っているかもしれない。でも神はそんなことを言われたいのです。主イエス・キリストのいのちをもって救ってくださったあなたに対して、神が言われるのは「わたしはあなたを使う」です。神ご自身の栄光のためにあなたを用いると言うのです。これが神様があなたに与えてくださった約束です。願わくば私たちの応答は「主よ、どうかこの私を使ってください」、「あなたのみこころなら私を使ってください」と、そしてそのために我々は自分自身を聖めて罪から離れることです。そうするならば主はあなたを使うと約束してくださった。

8. 「主の褒美」 詩篇 58 : 11、ルカ 6 : 23、I コリント 15 : 58

8 番目は主の褒美があるということです。主はあなたに報いを下さるということです。主のためにさまざまな迫害を経験するならば喜べとイエス様は言いました。ルカ 6 : 23 には「その日には、喜びなさい。おどりがあって喜びなさい。」と、あなたが信仰ゆえにいろいろな迫害を受ける時に喜びなさい、おどりがあって喜べと。なぜかというと、「天ではあなたがたの報いは大きいからです。彼らの先祖も、預言者たちをそのよう」であったと。私たちはこの地上のことだけ見て生きるのではない。我々は永遠を見て生きるのです。イエス様の前に立った時に、神があなたや私の信仰生活に対して、それにふさわしい報いを下さると。だからこの地上に置かれている間、私たちはベストを尽くして主に仕え続けるのです。「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい」、なぜなら「あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」、I コリント 15 : 58 です。あなたが主のためになすわざは決してむだではないと。主がそれに対して報いを下さるからと。少なくとも我々信仰者はイエス様の前に立つその日が来ることを覚えながらきょうを生きることです。どんなわざもあなたが喜びを持って、主を愛するゆえに犠牲的になすなら、主はそれを喜んでくださる。

9. 「主の御顔を拝する」 ガラテヤ 5 : 5、I ヨハネ 3 : 2-3

そして最後に主の御顔を拝する日が来るのです。ガラテヤ 5 : 5 にパウロがこんなふうと言っているところがあります。「私たちは、信仰により、御霊によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです。」と。つまりパウロは信仰によって救われた私たちは「義をいただく望み」を持って生きる者へと変えられたと言います。ではこの「義をいただく望み」とは何かというと、私たちがイエス様に似た者と変えられて、イエス様とともに永遠を生きるという希望の話です。私たちはイエス様にお会いする時にイエス様に似た者に変えられるのだと。ヨハネも I ヨハネ 3 : 2 でそのことを教えています。我々はみんなそのことを信じています。

なぜ我々はその時を待っているのか——。愛する主の御顔を拝するだけではない。私たちは、栄光のからだをいただくのです。パウロはローマ 8 : 23 で「子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」と。なぜそれを待ち望んでいるかというと、その時に救いが完成するからです。イエス様を信じて永遠に罪を赦していただいた。赦された者として、神の恵みを信じて、神に頼りながら信仰生活を歩み、そして日々イエス様に似た者に変えられていく。最終的に私たちは栄光のからだをいただく。これをもって救いは完成するのです。そして感謝なことにこの栄光のからだをいただくなれば、罪を犯すことのない者として栄光のからだを持って私たちはこの主を礼拝することができると。パウロは熱心にそれを抱いている。なぜかというと、その日が必ず来るということを信じているからです。我々もその日が来ることを信じながら、与えられたこの日を主の助けをいただきながら歩いていくことです。

今、私たちは9つの約束を見てきました。我々信仰者が希望を失わないためには、神の約束にしっかりと立つことです。我々は罪の赦しをいただき、罪に勝つ力を与えていただき、永遠の住まいをいただ

き、主の助けをいただき、そして主の憐れみをいただきながら歩むことができ、主は必ずすべての必要を満たしてくださるという約束を持って歩むことができる。同時に私たちは主によって用いられ、主は私たちの歩みに対してその歩みにふさわしい報いを下さる。そして我々は主の御顔を拝するその日を迎えることができる。そのことを待ち望みなさいと。

日々の生活において、確かに「どうして？」と思うことがあります。自分に関してだけではなく人についてもなぜこんなことが、どうしてこんなことが起こるのだろう？なぜ神様はこういったことを赦されるのかと。ウィリアム・クーパー、彼は鬱病に悩まされていた人物でした。恐らく彼の生い立ちが原因していたのかもしれませんが。というのも彼の両親はウィリアムが生まれる前に3人の子どもを亡くしていたのです。そしてその後、末っ子のジョンが生まれる前に生まれた二人の兄弟も亡くなっていました。そして末のジョンが生まれてから数日後に母親も亡くなっているのです。大変な悲しみの中で育ってきたことは言うまでもありません。鬱に悩まされていたウィリアム・クーパーは何度も自殺を図っています。彼は1763年12月に32歳でロンドン中央部から北へ22キロほど行ったセントオールバンズの精神病院に入院することになります。この入院生活において、彼は庭にあったベンチの上に置かれてあった聖書を開くことになります。そしてヨハネ11章のラザロの復活を読んだ彼は、ラザロに対する主の憐れみに触れて心からイエス・キリストを信じて救いにあずかります。

彼が最後に書いた曲が聖歌274番です。“くすしき御神の 聖き御旨 波の声に聞き 嵐に知る”、こういう歌詞です。このウィリアムは大変な詩人で、我々がよく知るジョン・ニュートンと一緒に讃美歌を作ろうという働きにも関わった人物です。この歌詞で彼は自分の経験した悲しみや困難を嵐の海に例えます。しかし、そのような中にあっても神は信頼に値するお方であることを彼は告白するのです。荒れ狂う海も神のその足元の強固な地面のようだ、荒れ狂う嵐も馬車か馬に乗るかのようなものだ。つまりどんな大変な嵐が来ようと、神はすべてを支配しておられるのだと。この曲のほかの箇所には“御旨を疑う愚かさやめ 忍びて待てかし 主を信じて”とあります。「理解し難い神の摂理の背後には神は笑顔を隠しておられる」と、ここはオリジナルではこのように記しています。大変詩的だと思います。確かに理解し難い神の摂理、なぜ神様はこういうことをなさるのか、そういうことを我々は思うことがあります。でも彼は言います。あなたの不完全な判断力で神をさばいてはいけなと。主は私たちにとって不可能なこと、理解が困難なことをなされるお方だと。だから私たちはどんなことがあっても主の恵みによって主を信頼しなさいと。これが彼が記したことでした。確かに我々の日々の生活にはいろいろなことがあります。今それを我々は経験しているのです。でも、今このような世の中にあつて、我々クリスチャンだけです、希望を持って生きることができるのは。周りに起こるすべての出来事の背後にそれらすべてを支配しておられる神の笑顔があり、ちゃんとすべてのことをわかっておられる主がすべてのことをなしておられると。皆さん、このお方を信じることです。神であられる私たちの主に信頼を置くことです。それはこのウィリアム・クーパーが記したことでした。このお方はあなたの身代わりとなって死なれた神です。そしてその死より敢然とよみがえられ、今も生きておられるお方です。この方を見なさい、このお方が私たちの希望だと。このお方にいただいた約束にしっかりと立ちなさいと。

悲しいことにこの世の中の人々と同じように憂鬱なクリスチャンたちが多いことも知っています。いろいろなことに悩み続けている信仰者、いろいろなことに批判的で落ち込み続けている信仰者。確かにあなたは多くの問題を抱えているかもしれない。担い切れないと思うほどの苦しみや悩みの中にいるかもしれない。神様にどうして？と言いたくなる状況にあるかもしれない。もう死んでしまいたいと思うほど、心は落ち込んでいるかもしれない。たとえそうだとしても、その真ただ中であつて、あなたは希望を持って生きることができるのです。なぜならあなたの神は敵である死にも、サタンにも勝利された復活の主イエスだからです。そしてその復活の主イエスを信じる者があなたなのです。希望を失ってどうするのですか？目を開いてしっかりと見ることです。あなたのあらゆる問題の背後におられる、すべてを支配しておられる主権者である主を、最善しかねないあなたの神を見ることです。この主を信じて、信頼を置き続けること、それがあなたにとって必要なことです。主は約束されたことを必ず実行なさると信じてあなたが歩むなら、あなたは決して希望を失うことはない。そうして、私たちはこの世に対して、この主イエス・キリストだけがいろいろな物事に動じない本当の希望を与えてくださるお方なのだというメッセージを示すことができるのです。復活の主を覚えて、その方に心から信頼を置いて与えられた一日一日を歩んで行きましょう。この方は確かに信頼に値する復活の主であられます。